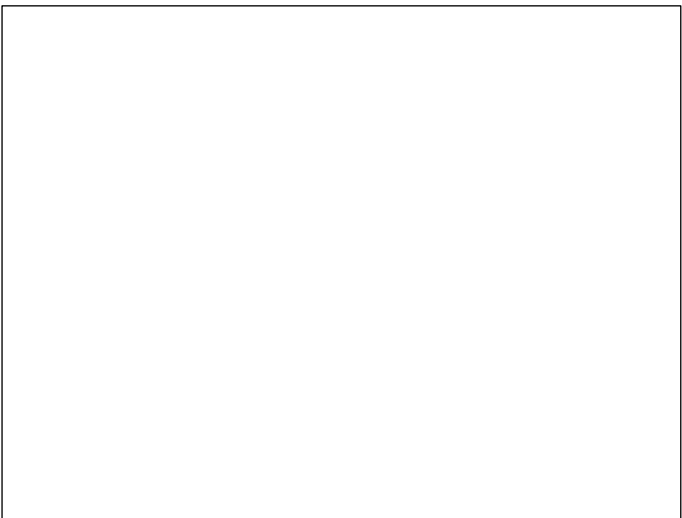


第四回俳句賞「25」

応募作品一覧



1 静かなる

白猫の潜りてゆける椿かな
新宿はひかりの数多受験生
宇宙より塵の降り頃水温む
長閑さや遊覧船のかたき席
陽炎を横切る魚のやうなもの
父親に似て硬き髪洗ひけり
夏風邪の空が途方もなく深い
金蠅や机をどんと手が叩き
向日葵の影伸び来たる畳かな
屋根裏の小さき窓や台風来
水澄むや青筋走る掌
日の当たる小屋の白塗り葡萄狩
案山子翁過ぎゆくものの中にあり
防犯カメラは枯木道のみ映し
戦艦のごとき進水おでん種
うつむいてなすすべもなし冬茜
夙に見る峰よきかたち初比叡
一人上がれば双六の紙薄き
あかあかと雪を踏みをる鳩の足
残り火の丈比べたる火鉢かな
どこまでが夢どこからがヒヤシンス
蝌蚪の尾を透け流れゆく塵芥
卒業子大き袋を抱へけり
野球部のこゑをとほくに桜かな
夏近しジャングルジムに雨しづく

2 2020with コロナ

春迎え新たな緑に胸おどる
暖かな太陽よそこに家の中
桜の花人に見られず散ってゆく
窓見れば居間から遮る姥桜
扉開け負い目を感じるいま日頃
マスク付け夏衣着ればみなイケメン
口元を見せることに恥ずかしさ
真夏日のマスク登校苦しいな
予期せぬ敵と変わらぬ町に白き光
夜の秋終わりを告げる花火かな
おまつりだみんなワイワイまぼろしだ
人に会うそれすら躊躇悲しいかな
ささげめし不意に芽生える恋心
秋風よそのまま飛ばせご時世も
カマキリとハリガネムシは共同体
いくつもの成果を出せず年惜しむ
ブリを釣りさばいてみればアニサキス
咳きこむと集まる視線息詰まる
霜降りて足音響く登下校
神渡しさげすむ風が身を守る
戻るかな顔から布が取れる日々
せまる影さっていくのをしばし待つ
コロナでね距離を感じて悲しいな
鼻水もマスクで隠れる花粉乙
昼起きてとりま食べるかインスタント

3 往来

アパートの角部屋の鍵秋の空
爽やかや上り列車の過ぎた風
蝸や公衆電話は空っぽ
蝸や絵本袋に解れあり
銀杏散る屋根に落ちたる鳥の糞
線虫の青き光や冴ゆる月
賢治忌の風車ふわりと回り出す
敬老の日空席多き電車来る
台風過ぐブルーシートの覆う屋根
小春日や鉄骨のある熊本城
軽トラに仮設トイレや冬霞
冬うらら油圧ショベルが動きだす
冷ややかや路上ライブの缶は空
順延のサーカス会場空っ風
空っぽのショーウィンドウや十二月
凧や昭和の理髪店の窓
冬浅し広角レンズの歪みかな
冬銀河ブラウン管テレビにひび
加湿器や缶コーヒートの熱冷める
空缶の多き袋や冬深し
狒犬の皿に集まる寒波かな
凍る夜やお湯をいれたるカップ麺
寒禽や片恋なんて認めない
私の顔すつとんきょうと言われ鱈
信号の向かいの君の息白し

4 四季折々

滝のそば負けじと生える春の草
春日和胸が高なる新たな場
春風に揺れる黒髪目を惹かれ
春風と心躍らす愛娘
移りゆき流れる雲に春惜しむ
晩春や夜が明け待つは夏の日かな
空見上げ静かに流れる雲のみね
夕立に降られ足止め暇つぶし
目覚めれば響くは疾雷猛々し
夏祭り活気が戻る楽しさを
暑き夜やうとましくともあはれかな
遅らせるべこの速さは蝉の声
草の下夜の寒さに残る虫
雲鳥居細くたなびく秋の風
水面に照られ映えられ金木犀
行く秋や揺れる紅葉のはかなきかな
秋雨に濡れる紅葉の露落ちて
秋澄む日紅葉落ちてく過ぎる日々
夕暮の寒さ厳しき秋の声
正月や家族集まる憩いの場
身魂に寒さ沁み入る冬早
帰り道ため息ついて息白し
白息と薄紅に染まる顔
粕汁の湯気見る時ぞ祖母の愛
冬の空オリオン座うかぶいとおかし

5 風懐の音

山頂の風や魚氷に上る朝
影法師置き去りにして雪解川
友と踏むあぜ道どこまでも春
ミサンガをちぎり春一番に立つ
新緑の雨柔らかに墳丘墓
東西に貨車の疾風夏浅し
チャイムより城の鐘の音青嵐
あの雲は琵琶湖生まれか夏の風
新快速青白い灯の熱帯夜
散歩道従兄弟にかざす風鈴草
夏茜ふるえる羽に陽を染めて
追いかける夏の残り陽日々草
秋開く「心の琴線」のわた雲
美容師のはさみの「ジョッキリ」秋涼し
日替わりのピンはブラウン秋麗ら
空地には車庫にイチジクそよぐ風
参道の真ん中をゆく秋の空
運動会塩水につけすぎたリング
真白なバケットハットにぶどう落つ
七輪の秋刀魚に浮かれ竹刀置く
バツタよけ父の自転車の軋み
なごり陽のぬくもりつかむ通学路
模試終えて丸き鉛筆の秋思
白線に色なき風やベース抜け
葉とともに雀も攫え木枯らしよ

6 いつも空は

春光や水筒に傷きらきらと
春めきてばちんとギター弦の切れ
永き日のイヤホン越しに人の声
木苺の種かみ砕く朝まだき
噴水の水の行く末目で追う子
盆踊りただただ手足滑らせる
半額の打ち上げ花火見て買わず
あの辺りかと語り合う天の川
読み返す生徒心得今日の秋
秋暑し鉛筆の芯また折れて
ブレザーが少し小さし秋気澄む
赤本を積み上げ檸檬頂上に
ビー玉の中心草の穂の見ゆる
山ぶどう潰し開店ジュース屋さん
爪立ちて蔦と片手をつなぎたる
初めての槍投げ秋の空高く
前ならえ直れ休めよ鰯雲
校庭に仲間呼ぶ声秋夕焼
満月の方へと一人帰る道
日の暮のカーブミラーに残る秋
冬だまた私の知らぬ冬がきた
大縄跳数える声や冬麗
回文を口遊みつつ冬うらら
冬ぬくし小さき靴の落し物
冬の空飛行機雲が縦に割る

7 押した鍵盤

長閑さや賽銭箱の前に立つ
春風を受くるボルトに浅き傷
指先に炎のありし薪能
むつごろうの古き巢穴の白さかな
旗振りの指紋は薄し麦の秋
蒜の花や夜勤を終へる父
メーデーの立ち食ひ蕎麦の匂ひかな
片蔭に買ひ物袋のみ入れる
駅前をぼとりぼとりと夜学生
コスモスが咲いて柱の軋むかな
キヤタピラは遅い九月を踏んでゆく
月光の身体傾く鼠かな
十六夜や鋼は紅く色づいて
病棟を移る背中や青蜜柑
秋麗に鸚哥の脚の鱗かな
稲刈や首のほくろに日の当たる
いちめんの枯葉の迫る車かな
自転車に浅く座つた冬が来る
割引のコロッケ買ふや雪催
作業場の短き布の炬燵かな
医師逝くを告ぐる貼り紙冬の暮
初時雨押した鍵盤が戻らぬ
塩鮭の身のぼんやりと温かく
瓶詰の雪やホテルの化粧室
寒椿水面に白き魚の腹

8 春夏秋冬

鴨の子の兄弟たわむる昼下がり
初詣おでんの味が別格だ
勇氣出し新たな世界風光る
如月の風に揺れ舞う白い花
桜咲く何も出来ずに時過ぎる
花の色移り行くのも朧月
夏が来た触れてく風もぬるくなる
夕焼けに練習姿かげうつる
山青く風香るけど暑き日かな
炎暑の青小さく灯る赤い花
足元にまばゆい星空うみほたる
夏の昼みんなの家から見える虹
美観地区水面に輝く青柳
爽やかな風浴び歩く夜の道
秋の朝となりの木から匂うブナ
またたびの操られること子猫かな
夕焼けに染まる祖父の吊るし柿
青紅葉日頃すぐれば色ふ目路
冬の暮見上げた夕日に淡い月
雪が降り足跡続く雪の道
クリスマス子供の欲が大爆発
多の意味でマスクと共に過ごす冬
音もせず寒くなる夜の神無月
焼き芋の湯気にはころぶ子らの頬
凍る空窓にたたずみまもる猫

9 きこえる

春の池花びらが散るサラサラと
踏切のまだ鳴りやまぬ新学期
新学期高まる鼓動に深呼吸
空き缶もカラカラコロン春祭り
汗ぬぐい暑いと笑う友の声
ピアノの音反抗期かな梅雨寒夜
胸躍る祭囃子と下駄の音
水遊びはしゃぐ子供を眺めつつ
ダイビングザバツと潜る宇宙人
蝉時雨負けじと部活の音がする
つくつくし今年も夏にご挨拶
麦わら帽中に広がる波の音
扇風機今年は少し風邪気味だ
ぼんぼりの照らす笑顔夏祭り
蝉が見る七日目に見る走馬灯
夏過ぎて残暑を打ち消す虫の声
秋告げるきりぎりすの声キリキリと
のど自慢マツムシスズムシ大合唱
はらはらと静かに落つる赤紅葉
帰り道枯れ草踏む音快き
試験中教室に響くペンの音
寒いから目覚まし時計聞こえない
雪を踏む着ぶくれ姿愛おしい
年末は紅白つけよう歌声で
除夜の鐘澄んだ夜に鳴り響く

10 音

強がってコンビニ雷までの距離
 夕立やヒーローのごと髪濡らし
 人混みに好きの一言花火の夜
 風鈴の真下に富士の高嶺かな
 二重虹ひとつ多めに角砂糖
 捨て犬の眼に映りたる大花火
 夕立の引退試合一点差
 風鈴の金魚青空泳ぎけり
 渋谷ハロウィン十六夜の月出でて
 割れたる柘榴戦争を語る祖父
 静寂と闇を生み出す天の川
 終電のテールランプや秋深し
 歩み遅き祖母の手を引く花野かな
 林檎収穫ラジオを枝に掛けて
 クリスマスチキン貪る親子猫
 自転車の轍楽しげ霜柱
 寒鯉の濠に潜める城下町
 家々凍てて地域清掃の朝
 風花や古き友よりエアメール
 先頭を争って踏む霜柱
 失恋を吐き出すつもりシャボン玉
 春寒や出窓に鳥のぶつかりて
 春泥の真ん中を行く反抗期
 新しく幼稚園建つ百千鳥
 化粧品売り場賑はふ花曇

11 小舟

助手席を倒し春三日月に雲
 子を宿す猫の波打つ腹と寝る
 ひらがなの羅列の春の光めく
 かさぶたを剥がして雨のねぢあやめ
 五日目の日記を開き雛あられ
 消火器に無数のへこみ啄木忌
 細き手に揚羽の時を奪はせり
 母の日の空と水たまりを踏みぬ
 参考書きつく束ねて五月晴
 負け終へて掬ぶ泉を揺らすこゑ
 教会にひらくオリーブ風を待つ
 どの嘘も甘やかなりて海開き
 降る光飛魚の背の深さまで
 長き夜や瓶に小舟を育みぬ
 ケチャップを振り下ろすたび秋思かな
 竜胆の湧き立つ墓に名の太し
 野分雲パスタの鍋を嘔きこぼす
 秋蒔の人差し指の長くあり
 こんにやくを手綱に結び律の風
 神渡しカップ麺食ふまでの歌
 綿虫や仮設トイレのドアかたし
 紙漉の匂ひ喻ふるために嗅ぐ
 三寒四温夜を待つ体温
 枯野道はちみつ飴の溶けてゆく
 冬の梅ほころぶ街よ幾星霜

12 こちらキッチン探検隊

十七の春愁サイフォンのしづく
春雨や酢飯の味見もそもそと
ガスコンロの火は小さめに楓の芽
花冷えや中国茶器をゆく駱駝
サバ缶が四つ遅日のパントリー
紙パックかわき春夕焼うるむ
丁字草挿すピーラーの右どなり
フライパンの蓋すつと立つ白桜忌
ミキサーのプラグの歪み蟬生る
くちなしの花や令和のレシピ本
夏雲を吸って膨らみゆくニョッキ
取れかけのラップそのまま祭笛
卵焼きの巻き方ゆるい今朝の秋
終戦日の空になきだす薬罐かな
岩塩の割れ目はピンク小鳥来る
星月夜ハウルの城にIH
ヘアグラス乾いて百舌鳥の声一つ
揚げ油かためる父の夜長かな
勤労感謝の日炊飯器は空っぽに
固まった砂糖ほぐせば冬かもめ
シンクには磯の香かすか冬の朝
ホイッパーの柄に赤錆や冬薔薇
出汁の香のしみたミトンや冬銀河
成人の日やまな板に浅い傷
チョコ溶かす温度はぬるめ寒椿

13 学生の四季

花吹雪やわらかな風浅き春
新学期笑みがこぼれる貴方いる
春の陽におぼろげに聞く友の声
土筆生え春の終焉肌湿る
葉桜と惜しむがすぐにすぐ青葉
ラントレで意識朦朧日の盛り
体操着白き背中に陽は映える
汗光る頑張る君にポカリ渡す
空の青頬を伝うは汗と涙
屋上で君は密かにベガを見る
アロハシャツ袖から見える日焼け跡
垣根越え金木犀の香りする
通学路葉の色変わる秋の気配
いつからか君と目が合う秋学期
赤や黄の生の炎色山化粧
紅葉散り肌寒き夜突然に
木枯らしと同じく乾く胸の内
曇り空白い吐息冬が来た
霜柱踏んで歩く通学路
近づきたいマスクの君とディスタンス
雪が降る今年最後の登校日
登下校重ね着しないと寒すぎる
夜更けどともる灯りとわが闘志
桜散り空の教室喪失感
めぐりめぐわが思ひ出と桜の木

14 星の図鑑

あはき雪濃き雪のあり初詣
 山眠る髪のかわいてゆく匂ひ
 温室が欠伸のやうに続きけり
 空き瓶のうすぐもりより蝶生まる
 春雷や買はぬつもりペン試し
 大いなる闇あり女王蜂と呼ぶ
 はるかなるもの束ねんと風船売
 知らぬ草ふたすぢ混じるうまごやし
 聖五月羽のごとくに茶葉沈み
 鉛筆は刃に痩せて椎の花
 自画像に髭すこし足す青嵐
 蚊帳の中星の図鑑をたづさへて
 少年の磨く石塊百日紅
 日盛の大河の濁りゆく音か
 こんなにも兄のはるけき泳ぎかな
 桃の香の中にピアノの古びけり
 塵取りにうつすらと水白木槿
 衣被或る美しき顎を思ふ
 止みてなほ傘の一団あきざくら
 冷やかやささはと花踏んできて
 キーパーに独りの時間鳥渡る
 山茶花や耳鼻科の道をとうに忘れ
 ラガー等のずんずん影を濃くし合ふ
 東京や雨の聖樹に肩触れて
 踏切の向かうのポインセチアかな

15 サークスの獅子

口紅をつけてみたしよ千歳飴
 抛らるる銭の気持ちも七五三
 水面鏡木馬の腹の朽ちてをり
 汀いま平たくなれり花がるた
 投扇や不揃ひの歯を見せてゐる
 節料理ありし冷蔵庫の灯り
 流水を船の破片が進みゆく
 後部座席の置き去る景色山笑ふ
 薬や体育館の屋根丸し
 水道管工事中なり花盛り
 群がりの苔より漏れ出づる朧
 雲に入る一羽は少し遅れゐて
 夏の炉の灰延々と炙らるる
 鉄塔や青田真中に基礎のあり
 きりきりと結ぶ清しき登山靴
 石段をゆつくりおりて滝近し
 収穫や胡瓜の疣のはきはきと
 プールサイド瘡蓋の膨らんでゐる
 白桃を載せる皿を片しけり
 嬰兒の宙に近づく芙蓉かな
 月の夜のサーカスの獅子ずいと跳ぶ
 黄落や石段に僧ひとり掃く
 掌に筋深く濃く露寒し
 久しぶりの雨が楽しい鯨かな
 鯛焼の尾鰭ばらして鳩に撒く

16 祈り

重なった瓦礫の中の蒲公英よ
花ミモザあの日流れた船かとも
道端の慰霊の花の陽炎える
海温の上昇若布ざわざわと
食べ残しなくす運動昭和の日
風薫るマスクはずしてしまいたい
ビニールの袋と海月ゆらゆらと
浜木綿や鳥の死骸にプラのごみ
飢餓の子の空へ国境なき虹よ
コロナウイルスうつらぬように袋掛
七夕や今年はコロナ終息を
わが影の壁に張りつく広島忌
正義とは何か八月十五日
祈りとは忘れないこと終戦日
盂蘭盆や隣の墓は流されて
赤い羽根五百円玉惜しみなく
飢餓の子の大き眼や石榴の実
コロナ禍の父の出張夜の寒し
アフリカの子らの死冬の白鳥座
右足無き少年兵やポインセチア
マスクして歌う imagine クリスマス
先見えぬコロナ禍の日々日記買う
被災地や餅搗く人の手の厚き
コロナ禍やころころ太る雪だるま
復興のイルミネーション 枯木立

17 スカートの裾

小町忌やゆびおりてよむ恋の歌
スカートの裾たくしあげ磯遊び
祖母の指す電話ボックス 蜃気楼
背を向けしポニーテールや麗かに
本棚の埃の舞いて 朧月
触れそうで触れられぬ指桜餅
レポートにシミを作りし夏蜜柑
ジャージから覗くミサンガ南風
紫陽花や移り気な君の袖引く
ケータイのGPSを切りて夏
悪者になりきれぬ甥サンガラス
左手にモデルガン持つ浴衣かな
キャラメルを二つ握りて墓参
鳴き声の消えし犬小屋曼珠沙華
テーブルの離婚届や秋の夜
一筋の涙の如く流れ星
秋澄むやサイドミラーに富士の山
秋高し君と合はするチューニング
寒茜一番星を指にのせ
注射器に溜まりゆく赤ポインセチア
白息を煙草に見立て笑ふ鼻
言い訳をする君の目や雪兎
操舵手の缶コーヒーや初茜
愛猫の腰丸まりて宵の年
初電車いまだに声をかけられず

18 季節のパレット

残雪の大地に芽吹くあやめの花
色彩の光輝く花火音
紅葉を見ないうちに木は落葉
白銀に埋もれ消えゆくあの花も
春になり鼻はむずむず赤くなる
海だ海パンダ模様で最強だ
黒の中黄金に光る秋の月
冬の空きらめく星空指でなぞる
桜の葉刹那で咲いて散ってゆく
貝拾い手の中の砂先の群青
華奢な娘が木漏れ日受けて照らされる
初氷茶の深靴に雨しずく
新鮮のひらひら桜春の風
水の音気持ちさわやか一滴の
秋の色着込む人々裸の木
新雪に寝る芽キャベツ冬の朝
青空に浮かぶ峰雲雪のよう
真っ白な入道雲に手を伸ばす
夏休み冷やした部屋で毛布にくるまる
葉の色紅葉美しく秋探し
金の香の有明の月秋惜しむ
冬の空夕日の沈む時の流れ
外見ると白いセーター揺れている
寒気の日おでんつんつん楽しいな
雪の下いつまでも待つつまでも

19 単線の街

荷物みな身を締めつけて蝌蚪生まる
ため息のつめたさに似て石鹼玉
クリックの間隔あいて百千鳥
ちちははの喧騒遠く葦草
猫がゐるくらさの蜷汁であり
朧月人権作文書き直す
謝れば済むこと多し胡瓜揉
鈴蘭に小指の先の触れてゐる
噴水の穴もいろに錆びてをり
炎天や老人の持つ拡声器
くるぶしの常なる遠さ甲虫
カンバスの夕虹いつぱいに湛へ
肖像の蓄へし髭芭蕉の葉
聖みな目を瞑りたる大花野
家庭科の班決め終へて野分雲
ミスド買ふ父の背中や星流る
ゆつくりと一人になつてゆく秋刀魚
秋深しキーホルダーの煤けをり
じくじくとひらく切り傷冬の朝
水鳥の水に疲れてゐるかたち
冬の星踏切渡り損ねけり
一輪車とほれるほどに葡萄枯る
焼芋のしづかな方をもらひたき
冬銀河以外に何も無い故郷
単線の街を風花蹂躪す

20 「そこにあつたんだ。」

雪溶けてあなたと私サクラ咲く
書店にて光る相棒発掘だ
春の朝雲ない空に雲探す
友人と逸話りばかり桜並み
一目見て恋に落ちたの春一番
朝早く目覚まし時計せみの声
見上げればひまわりの咲く宵の空
新緑に吸い込まれた炎天下
かき氷君に夢中で淡い水
大花火私の心に火をつけた
夏の星私のスターどこかしら
夏の果て課題片手に反省だ
門を出て空の色見て気づく秋
化粧したもみじのはっぱはかめれおん
フウがわりカボチャもフラウオカシな日
愛しいとラブを届ける天の川
祖の帰り悲願に思う彼岸花
餅つかず遊ぶウサギと星月夜
単語帳手袋でめくれない
一時の我慢やマスク一年に
外を見て布団が恋しい冬の朝
おかえりと待ちくたびれた雪だるま
チョコットのコーイ意識の俺持つよ
吐く息が白いたため息受験生
夜食取りもうひと踏ん張り春隣

21 とりあえず

満天星の花ぞ教会灯りける
春一番郵政カブのクラクション
蒲公英を摘みまた摘みて仲直り
好きなのといつてしまつたしゃぼん玉
花冷えの少女の失恋歌の巡る
腕時計直す祖父の手山笑ふ
向日葵ちりぢり 絶交の便り
八月の空いつまでも爆心地
額の花落ちて子役の声変はる
キャラバンの助手席夏の星静か
観音の手を零れたる早星
改札に更新の指示秋の暮
フラスコに閉じ込められし秋の月
名を知らぬ町の神社や星流る
三日月の映りし窓の菓子司
虫の声造花の鋭きに止まる
朝寒や煙草の匂ひの残る路地
銅像の脚滑らかや冬薔薇
ともくんと呼んでみるなり冬銀河
バッテリーセンター凍星撃ち落とす
年惜しむアロマに詳しくなりし母
とりあえず未来の話して雑煮
年賀状お元気ですかが十五枚
をの音を強調したる歌加留多
初茜猫の眠れる定食屋

22 極月

初霜やリードの弛む田舎道
 牧場に座りて冬晴を撮りぬ
 乳牛の背のまんまるし冬日和
 落葉焚畑に垂直なシャベル
 室外機どろろと回る開戦日
 冬の月雲の切れ目を探しけり
 湯たんぽや腹のボタンをはめなおす
 紙袋撫づれば鯛焼の鱗
 侘助や信号待ちに袖伸ばす
 通学の傘重くする霰かな
 城跡に立つや数多の屋根へ雪
 じやんけんをして輝割れの痛さかな
 紙懐炉母に歩調を合はせたり
 スーパーの袋に焼芋の袋
 制服のまま飯食べて柚子湯待つ
 柚子風呂の柚子に重力無いらしく
 反対の校門通る冬休
 雑炊を食ひてソファーに戻りけり
 五千円持つて一人のクリスマス
 最終電車近し聖菓のショーケース
 数へ日の夜中にカレー作りけり
 古日記中指の傷乾きをり
 職員用玄関狭し松飾る
 六人のキッチン狭し餅搗機
 白組の曲順調ぶ大晦日

23 月今宵

スキップで登校木犀の香
 頬なづる色なき風に音のあり
 秋の池群がる鯉のおちよぼ口
 鈴生りに雀のとまる遠案山子
 彼岸花赤き糸垂れ参観日
 放課後の校門黄落巻き上げ
 言ひ訳をせぬ約束ぞ流れ星
 香を聞く長き静寂や菊ひらく
 石橋を代はる代はるに秋の園
 練兵場あとかたもなし祈り虫
 名物のまがりせんべい紅葉狩
 実紫こぼるる茶屋の緋毛氈
 指先に軌跡を残す赤とんぼ
 急行の後は銀波の芒原
 散歩道花束にする猫じゃらし
 繋ぐ手に力込めたり秋燕
 立ち尽くす鷺の目遠し秋の水
 足裏にめきりと鳴れり玄圃梨
 泣きさうな夕空ごと林檎かじる
 草の絮ゆふべの風を象りて
 椎の実の暗き水面に沈みけり
 軒下の祖母の干柿粉を吹き
 里祭り久闊叙する拳かな
 銀杏の爆ぜて始まる宵の膳
 赤提灯針なき時計月今宵

24 地上絵

帰り花かつては細き母の眉
大陸に眠る地上絵冬銀河
座布団のくぼみ故郷に鋤焼す
軒下に舟の朽ちたる冬隣
冬の虹傘にほやりと透けてゐて
手拍子に歌の速まる寒茜
がりがりと味のかはらぬ千歳飴
闇鍋の我が箸つつく先も箸
恋文に消し跡残し冬葵
空瓶にクミンの香る聖夜かな
まるまりつまたまるまりつ賀状書く
鐘の音を額に受くる余寒かな
春風の吹く方に猫鳴きにけり
うつすらと残るチョコクや雪解水
ひつつめの祖母とふたりや夏帽子
何もかもできる気がする跣かな
待ち合はせ場所に眺むる花火かな
墓前にてお経唱える渡り鳥
蝸や塔くつきりと影を持つ
芒原今朝すれ違つた人とまた
雲の端に光残して鳥渡る
学生の一列に寝る秋夕焼
丸椅子をふたつ机として夜長
竜骨に節目の残る秋思かな
紅葉且つ散る飴ひとつ噛み砕く

25 タイムラプス

春の風まだ冷たくて夜長い
新たな眼緊張供に雪溶けよ
桜舞う晴れた青空友浮かぶ
入学式友と通学凍返る
春の日の地面をうめる桜色
風吹きて散りゆく桃色木の芽出づ
空を見て満点の星夏の蚊帳
大暑の海暑さに耐えず汗をかく
いざ海へ焼けた足背白い跡
踏ん張れよポカリスエットにあと一歩
夏祭り浴衣で巡る夜の店
秋こいと汗を拭って麺すする
クーラーよ出来心から温暖化
蝸の鳴き声聞こえ振り返る
夏終わり私の心も秋の山
橙に染まる紅葉と秋の空
風誘う赤一色の秋の声
金木犀ほのかな香り秋深し
凍る体体温分け合う師走かな
黒マスクもれいづる白我の息
大晦日ひびわたるは除夜の鐘
明けましてなんたる幸せ初夢よ
凍て晴れや口先に雲マフラーと
ペンを持ちちまき巻いて春を待つ
冬を脱ぎ梅の隣で春を待つ

26 冬から始まる自粛生活

自粛中マスク着用必需品
チョコ渡し言い渡された休校だ
休校でテスト勉強やらずじまい
空白の自粛期間胸躍る
余る時間どう過ごすかは自分次第
自粛して打ち上げの予定お蔵入り
勉強をやるうとしたらあそんでた
ひまなときひたすら家で寝ていたよ
家について初めて気づくありがたさ
春休み友達恋し会いたいなあ
春の色見えるは窓の景色だけ
自己反省生暖かい春風と
初めてのオンライン講座新鮮だ
春の朝起きると隣に教室が
新学年くらすめいとと画面越し
新学期リモート授業で肩が凝る
外みるとピンクのロード閑散と
暇すぎて不思議と学校恋しくなる
桜散り運動のため縄を飛ぶ
通学路見える桜に花はない
夏場でもマスク必須で汗やまず
夏休み今年の帰省はオンライン
暑い夏マスクで外には出たくない
残暑なく新たな気持ちで外に出る
コロナより旅行キャンセルつらすぎる

27 空模様

雪だるま作りたいけど雪降らず
電灯の細き光と冬の雨
オリオン座浮かぶ夜空に白い息
通学の途中見かけた霜柱
冬の雷空を切り裂き耳ふさぐ
日が昇る雪解け水と乾く空
曇り空より暗くなる長い夜
通学路服の上咲く六つの花
春日和小鳥のさえずりほほえまし
空模様苺ミルクの連想か
三日月の満つるを待ちてスキ取り
今年の世自粛と三密年惜しむ
桜道太陽照らす新学期
太陽が顔を隠す梅雨の時期
鰯雲紅葉主演脇役だ
雪積りイルミネーション幻想だ
雨降った蛙が飛び出し歌ってる
天気雨予報でたらめやめちまえ
雨の日だ部活休みだ感激だ
快晴だ洋服乾くのど乾く
雨続き梅雨前線早く去れ
並木道黄色に染まるくさいみち
落ちゆく葉恋しく思う家の風呂
またたくま気温差によりしろめがね
じりじりと寝かせてくれよアブラゼミ

28 ハチ公前の怪獣

まどりみて怪獣叫ぶ夏の雲
路地裏にビー玉落とす冬の星
榛摺のポニーテールの踊る夏
竹の秋背比べしたる通学路
夏暁やこれやこれやとカラス鳴く
弟の西瓜先端ひとかじり
踊り子の輪に混じりたる小鳥かな
天楽の響く夜空や秋祭
十六夜の月に絵馬書く古社
排気ガス沈む夜道や火の恋し
ゴンドラの影遠ざかる秋の山
渡り鳥のような彼を待っている
ミルクパズル解く蝋燭のクリスマス
聖夜祭既読のつかぬハチ公前
深更に傷心の癒ゆ虫の声
蝉時雨従弟の持てるショート傘
親性を海とも言へり竜の玉
狛犬の頭に届く宵の年
海霧や空を飲み込む放行鳩
焚火して闇に溶けゆく日曜日
セーターの袖をまくりて空返事
翔け昇る鶴を見送る入り日かな
不明者の市内放送山眠る
すれ違ふ人人人や隙間風
スクランブル交差点片手袋を探したる

29 冬

雪が散る一緒にいるとなんか Chill
白い雪積もればまるで広い海
冬来てもボードゲームで凍えぬ手
澄んだ朝開けた窓に見る結露
冬の森ふたたたびみたいむささびを
ホッカイロあの子のぬくもり御来光
冬の夜愛するあなたへプロポーズ
ゆきとけて頭角現わせ休み明け
荷をとって駆けだす朝に白い息
鍋囲むほっとひと息冬の夜
冬の風ちくりと刺さる心地良さ
冬籠り起きろ起きろと母が言う
人想い凍える夜の心の灯
とろーりと湯気までおいしいシチューかな
クリスマスお前に会って想い言ふ
ホッカイロポケットの中のぬくもりかな
スキー場そこでは自分が主人公
お年玉欲しい思いの抑え方
マスク越し吐き出す息の清き白
散歩中風で感じる冬来たり
マフラーを巻いたあの日はクリスマス
冬空に出ては消える白い息
またあした会えなく溢れるみぞれかな
パチッとねふれる前なのドキドキ感
大晦日こたつで一人みかんむく

30 今日一の行事

春だから我の心は主観色
体育祭昼も終わると雲形定規
春愁や出会いと別れ繰り返す
こみ上げた思いを胸にまた来年
謬見も君の前なら自己主張
不安心希望に満ちる入学始
朝合唱冷やかな風に乗りながら
桜散る静まる教室最後の日
桜咲きぬれる頬と薫る思ひで
桜ふる高鳴る心臓巡り合う
奏であう気持ちのメロディー心のベース
世界一友と努めた集大成
青天下届ける声援応える英雄
桜咲くはじめの一步登校日
袖通す腕がひんやり衣替え
さむくても心は熱いさあ歌おう
水着着るわき出る思いああいやだ
水に触れ気持ち高ぶるもぐりたい
体育祭眩しい日差しが目に入る
文化祭一番楽しい準備期間
時進み並ぶ建物変わってく
合唱の重なる声色響かせる
なにげない日々の日常大切に
はじめての仲間とともに達成感
帰り道はしゃぐ子どもら懐かしむ

31 飛べぬ羽

袂より風の生まるる流灯会
かなかなの夕日にしがみつく声か
木がいつぽん伐られてみたり休暇明
上向きの蛇口いくつか小鳥来る
陸に置く舟あたたかし草の花
無患子のつぶさに落ちる夕かな
櫓田の光より鳥生まれけり
祖母の家に裏口二つ枇杷の花
水鳥や革ジャンパーの艶とほし
山茶花はむかしがたりのやうに散る
家ぢゆうの花に倦みけりカーペット
真白き陽かれあしはらの上澄みに
鴨鳴けば曙杉の降りしきる
スケーター腕は飛べぬ羽として
【既発表句】
耳打ちのしづけさに揺れ雪柳
遅き日やはつかに濁るレモンティー
小児科に天使の時計春休
野遊や真白きものは飛びやすき
図書館に自転車二台かたつむり
死火山の麓の平家蛍かな
青嵐牛の乳房のどつきりと
旅行記を書けさう蟻に囲まれて
東京を隠す雨なり冷奴
夏の蝶あるいは碧き葉の過ぎて